

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20791788
 研究課題名(和文)
 特別養護老人ホームにおける死の看取りを含む終末期ケア体制整備への取組
 研究課題名(英文)
 Actions for the Care System Preparation on Endstage of Life in a Nursing Home
 研究代表者
 古田 さゆり (FURUTA SAYURI)
 岐阜県立看護大学・看護学部・助教
 研究者番号：

研究成果の概要(和文)：

本研究において、振り返りカンファレンスによる施設職員の評価だけでなく、遺族面接による入所者の家族の評価を得て試案の死の看取りを含む終末期ケア体制を検討したことは、入所者中心の死の看取りを含む終末期ケアに繋がる体制整備として精選されたと捉える。また、本研究は、職員の死の看取りを含む終末期ケアに対する不安の軽減や穏やかな終末期ケアの実現に対する職員の意識向上に繋がったと捉えられる。

研究成果の概要(英文)：

In this study, Considering about the care system preparation by family's evaluation was selected carefully as care system preparation on endstage of life make up mainly of residents.

In addition, this study connected with commutation of a worry and the staff's conscience to quiet care realization on endstage of life.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総 計			

研究分野：老年看護学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：特別養護老人ホーム、死の看取り、体制整備

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

特別養護老人ホーム A 施設（以下、A 特養とする）と本学との関わりは、本学が開学した平成 12 年より 1 年次生の学外演習や 3 年次生の領域別実習、平成 17 年からは 4 年次生の卒業研究と、本学学部学生の全実習の受け入れ施設として実習に協力していること、平成 13 年度より開始している「特養利用者のその人らしさを尊重した看護援助の検討」の共同研究^{注 1)}において、A 特養の看護職がとしての役割を担っていること、本学における全学的な取組の一環である県内の看護職の活動の質的向上を目指した看護実践研究指導事業^{注 2)}における高齢者ケア施設の看護職対象の事業において、平成 15 年度に実施した岐阜圏域にある施設（看護職）として参加したこと、などである。これらの関わりの中で、平成 18 年度、A 特養が死の看取りを含む終末期ケア（以下、看取りケアとする）の実践を標榜できる施設として準備を始める際に、その取組の支援を要請された。

注 1) 共同研究：本学では、県内における実践現場の看護職と、日常の看護業務の改善・充実に直結した共同研究活動を展開している。これは、県下の看護職が提供している看護サービスの質の向上を目指すとともにその研究の過程で看護生涯学習支援・人材育成に寄与しようとするものである。

注 2) 看護実践研究指導事業：県より助成を受け、県内看護職の生涯学習を促進することを目的とした研修事業。県内看護職が大学の知的資源を利用して、自己学習や業務改善ができるようにするために、看護の実践研究指導・研修として取組んでいる。単に公開講座や研修を行うのではなく、現場看護職自身が現場の見直しを図り、各自の業務改善に直結することを重視しているため、まず大学教員が実践現場に出向き、県内看護職の看護活動の現状や実践上の課題を把握した上で、現場の実態に即した研修・指導方法をとっているのが特徴である。平成 13～15 年度および 17 年度に、特養の看護職を対象とした看護実践研究指導事業を実施している。

2. 研究の目的

実際に看取りケアを行った事例を振り返って看取りケアを実現するために必要なことを検討するとともに、入所者やその家族はもちろんのこと、職員にとってより充実した後悔のない看取りケアを実現する体制について、職員とともに考え、取り組んでいき、さらに、入所者の看取りケアの実践事例を通じて、整備した体制を評価し、更なる体制整備へと繋げることを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、準備段階を含め、2 段階から構成される。

(1) 本研究の準備段階

A 特養での看取りケアの体験事例を素材にした終末期ケア体制上の課題の検討

看取りケアに関する職員の意識調査と結果報告

試案の看取りケアの指針・マニュアルについての学習会の企画・実施

試案の看取りケアの指針・マニュアルに基づく実践事例の検討

(2) 本研究の方法

A 特養の職員とともに考案した看取りケア体制の試案に基づく 2 名の入所者の看取りケアの実践記録、遺族面接による看取りケアの感想、看取りケア後の振り返りカンファレンスの記録、看取りケアに関する学習会における職員の感想をデータに、～ は事例ごとに質的に、また は量的・質的に分類整理した。

上記のデータとその分析結果を看護・介護主任と確認・共有するとともに、入所者が穏やかな死を迎えることができ、職員が看取りケアを円滑に実践できる体制の観点から、試案の改善点を討議して、修正・精選した。

また、本取組に対する評価のために、本取組終了後、職員を対象に調査した。

データ収集期間は、平成 20 年 6 月～21 年 10 月である。

倫理的配慮は、本学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を受けるとともに、A 特養の施設長に本研究の目的・方法を口頭と文書で説明して同意を文書で得、施設職員と家族に目的・方法に加え、参加は自由であり、研究協力の有無によるケアの変化がないこと、得られたデータは本研究の目的以外に使用しないことなどを口頭および文書で説明し、文書で同意を得た。

4. 研究成果

(1) 本研究の準備段階

A 特養での看取りケアの体験事例を素材にした看取りケア体制上の課題の検討：これまで A 特養で特例として看取った事例を丁寧に振り返るとともに、平成 18 年 8 月の 3 事例、平成 18 年 12 月の 1 事例の体験事例から、「看取りケアを行う施設としての方針の明文化」、「看取りケアに関する指針の策定」、「嘱託医や職員間の連携による 24 時間対応体制の整備」、「入所者とその家族への看取りケアに関するインフォームドコンセントのあり方」、「看取り期において利用する記録用紙の開発」、「介護

職をはじめとする施設職員への看取りケアの不安に対応する教育の必要性」などの内容の適切性を検討し、精選するというものであった。具体的には、看護職と介護職の主任、事務長をリーダーに、筆者らが参加して、平成18年10月から平成19年7月まで1回/月の「看取りケアに関する検討会」を行い、事例ごとに前述の適切性を検討して修正を加え、精選した。

看取りケアに関する職員の意識調査と結果報告：看取りケアに関する介護職の意識調査は、平成17年度に実施されていたが、すでに1年経過し、この間に看取りケアに関する研修会や討論会が実施されていたこと、また看取りケアを行う施設方針を決定したことから、その意識が変化していることが推測された。そこで、介護職とともに看護職も対象にした「A 特養における看取りケア実践に関する職員の意識調査」を実施し、その結果から課題を整理し、それに基づいた取組を計画した。その結果は、施設での看取りケアの経験の有無について、「経験したことがある」職員は半数であり、看取りケアを通じて良かったことは、【自然で安らかな死を迎えられたこと】【家族の満足感が得られたこと】などであった。看取りケアを通じて困ったことやジレンマに感じたことは、【家族間で意見の相違があること】【家族の協力が得られないこと】などが挙げられ、これは、看取りケアを通じて課題と思うこととして、【家族との連携】【職員間・医療の連携】の強化などが挙げられたことに共通していた。

施設で看取りケアを行うにあたり大切なことは、【入所者・家族の看取りケアに関する事前確認】【入所者の意思の尊重、家族の意向との調整】【自然で安らかな看取り期を過ごすこと】などであり、看取りケアを行うにあたり不安なことは、【職員が少ない夜間や急変時の対応】【入所者の苦痛の訴えに対する対応】などが挙げられた。

看取りケアを行うにあたり、施設に望むこととして、【家族が宿泊・休息できる部屋の確保】【看取りケア専用の個室の確保】【看取りケアについての職員教育】など看取りケアにあたっての部屋の整備や職員教育が挙げられた。また、介護職が看護職に望むこととして、【夜間・休日、急変時の看護体制の充実】【看護・介護の連携】【十分な情報提供】など介護職の看取りケアに対する不安への対応が求められていた。さらに、看護職が介護職に望むこととして、【看取りケアについての介護・看護の共通認識】【看取りケアに対する不安の軽減】が挙げられ、教員に望むこととしては、【よりよい看取りケアの体制作り】【死生観の充実】【看取りケアのマニュアル作り】などが挙げられた。その他、看取

りケアを行うことについて考えていることなどは、【その人の意思に添ったケアの必要性】【看取りケアに関する情報・学習の機会の必要性】などであった。

調査結果の報告会は多くの参加者が得られるよう2回開催し、従来型の介護職・看護職を対象とした報告会には、介護職10名・看護職3名の計13名の参加が得られ、ユニット型の介護職・看護職を対象とした報告会には、介護職13名・看護職2名および事務長の計16名の参加が得られた。この結果報告に対する職員の反応は、【認知症高齢者の意思確認に対する疑問】【食事を食べたい思いのある窒息の可能性のある入所者に対するケアへの葛藤】などであった。さらに、報告会終了後に記述してもらった感想・意見は、【看取りケアに対する思いが共有できた】【看取りケアの知識を得る機会・振り返りの機会となった】などであった。

試案の看取りを含む終末期ケアの指針・マニュアルについての学習会の企画・実施：施設職員が一丸となって、入所者の求めに応じて、看取りケアを実践するために、上記に基づいて課題を整理し、看取りケアの指針やマニュアルを検討し、試案を作成した。なお、試案の看取りケアの指針は、具体的には、看取りケアの考え方、看取りケアの視点、A特養における医療体制、看取りケアの具体的な支援内容、夜間緊急時の連絡と対応、協力病院と連携体制に関する内容などである。看取りケアのマニュアルは、ケア体制も含み、具体的には、入所時における入所者と家族、施設における看取りケアに関する説明と意向確認の内容・方法、確認者、の施設職員への周知方法、医師による看取り期の診断後における看取りケアの指針を活用した説明と意向の再確認の方法と担当者、の職員への周知方法、看取りケアのカンファレンスの実施と参加者、看取り期におけるケア計画立案と立案者、看取り期における看護・介護の記録様式と記載の方法・手順、看取り期における心身の変化や主な症状と各々のケアのポイント、病状悪化時と夜間緊急時の連絡網と対応方法、看取りケア後の通夜・葬式の参加方法と参加者、看取りケア後の振り返りカンファレンスの企画者と実施方法から構成され、その内容を詳細に明示するものとして文章化した。

そして、試案の看取りケアの指針やマニュアルについての学習会として、施設職員を対象に、平成19年8月20日18時から19時に実施した。参加した施設職員は、24名（44.4%）であった。具体的な内容は、看護職の主任より試案の看取りケアの指針やマニュアルの概要が説明され、その後、ディスカッションを行った。職員から、看取りケア

の指針やマニュアルに関する質問はなかったが、「看取り期における呼吸困難や食事量低下などに対し、どうしてよいか悩むことはないか」という問いかけに、施設職員からは同意する反応がみられた。これに対し、「何もしないことに罪の意識を感じることはなく、高齢者が最期のサインを示していると捉えてみてはどうか」、「静かに見守るということ、自然に亡くなっていくことを家族へも説明していくこと」、また「最期のケアというよりは常日頃からのケアが大切であること、経験が自信に繋がっていくこと」などが説明された。

試案の看取りケアの指針・マニュアルに基づく実践事例の検討：試案の看取りケアの指針・マニュアルに基づいて、平成19年6月の1事例、平成19年8月の1事例、平成20年1月の2事例の看取りケアが実践された。これらの事例を通じて、さらに看取りケアの指針・マニュアルについて再検討し、修正を加えた。ただし、これらの事例はいずれも認知症により高齢者自身が自分の意向を伝えることが困難であるため、家族の意向に基づいて看取りケアが実施されていたが、中には、家族の意向が本人の意向を反映したものであるか否かに疑問を抱く事例もあり、課題として残された。

以上、A特養においては、平成18年度、入所者の求めに応じて看取りケアを行う施設方針のもと、看取りケアの指針やマニュアルを整備するとともに、看取りケアにおける施設内外の職員の役割と連絡・連携方法など、その体制整備の検討および学習会などが進められてきた。その結果、職員のA特養での看取りケアへの思いは、「その人らしく、自然で穏やかな死を迎えることができる看取りケアを実現したい」であったが、施設での看取りケアの経験がない職員が半数を占めたことから、施設において看取りケアを行っていくことに、依然として、不安を抱いている職員もいた。また、認知機能の低下・障害のある高齢者の場合、看取られる場やそのあり方などについて、入所者本人の意向確認が困難なために家族の意向に基づくが、それが入所者本人の意向を反映したものか否か疑問のある場合も少なくなく、職員がジレンマに陥っている状況もあった。

(2)本研究の成果の概要

実践した看取りケアの対象は、2名とも認知症を併発し、看取りケアの意向は、家族の意向によるものであった。

看取りケアの実践記録より、看取り期の診断による看取りケアの説明に対し、家族支援の強化の必要性などが挙げられた。遺族

面接から、2事例とも共通して「家族へのケアも含め、看取りケアに満足感がある」「過剰な処置をせず、自然な死を迎えられた」等の満足感が示された一方、「入居者本人の意向が確認できなかった」等が問題として明らかになった。振り返りカンファレンスにおける職員の感想では、「カンファレンスなどで思いを共有できる場を持つことは有効であった」の他、「もっと何かできたのではないか」という思いがある」等、職員は、振り返りカンファレンスで良かった体験だけでなく、辛かった体験や否定的感情も示された。実施した学習会の職員の感想は、企画した内容に対する学びの他、「看取りケアに不安があったが学習会によって軽減された」「より良い看取りケアの実現のために必要なことを考えた」等の学習会の効果や「看護職によって安心できる」と看護職への信頼が示された。一方、「介護職にとって医療職が不在になる夜間に不安があるが、オンコール体制は看護職には負担に感じる」等、夜間の拘束に対する否定的感情も示された。

以上の結果を施設職員と確認・共有し、試案の改善点を討議した結果、看取りケアの意向確認とケアに関する説明、看取り期における家族支援の強化、振り返りを含むカンファレンスの企画・運営や学習会の企画などにおける看護職・介護職の役割や連携の在り方などが精選・修正が修正された。

本取組に対する職員の評価では、A特養の職員49名（看護職4名、介護職45名）および看護主任・介護主任に質問紙を配布し、51名全員から回答が得られた。

本取組に対する看護主任・介護主任の意見として、【本取組に参加したことでの自分自身・職員への効果】【第三者（筆者）が入ることでの効果】【今後のA特養における看取りケアの課題】【今後のA特養における看取りケアについて困難に思っていること】【看取りケアのマニュアルに対する意見】【その他】に関する内容に分けられた。

さらに、【本取組に参加したことでの自分自身・職員への効果】に関する内容は、[看取りケアに対し、自信が付き、安心して取り組むことができた]などであり、【第三者が入ることでの効果】は、[分からないこと、不安に感じることを聞くことができ、安心感に繋がった]などであり、【今後のA特養における看取りケアの課題】は、[入所者が家族の愛情を感じることの出来る環境の整備][家族が理解・納得できる説明の必要性]などであった。また、【今後のA特養における看取りケアについて困難に思っていること】は、[嘱託医の自宅不在時の対応への不安]【看取りケアのマニュアルに対する意見】は、[知識を得ながら看取りケアのマニュアルが作成できた][看取りケアのマニ

ュアルが施設の財産となった】【その他】は、
[これまでの取組を生かし、次世代へ繋げて
いきたい]であった。

本取組に対する職員の意見として、本取組
から影響を受けたこととして、31 名から 41
記述の回答が得られ、回答内容を整理すると、
【本取組によって看取りケアへの不安が軽減
した・心構えが出来た】【本取組は看取り
ケアについて学習する機会となった】【看取
りケアを通じて生きる喜びを実感し、死に向
き合っている】【看取りケアの実践を通じて
入所者の姿に感動した、家族の繋がりの大切
さを感じた】【看取りケアのマニュアルを確
認する機会となる】【その人らしい看取りケ
アの実現を考える機会となった】【振り返り
カンファレンス・遺族面接はケアを客観的に
振り返り、今後に繋げていくために有効であ
る】【振り返りカンファレンスによる職員の
倫理教育の重要性を感じた】【学習会による
知識・技術の向上の重要性を感じた】【他の
職員から意見を聞くことのできる貴重な場
となった】の 10 に分類できた。

その他、感想等について、24 名から 26 記
述の回答が得られ、記述内容を整理すると、
【入所者・家族にとってより良い看取りケア
を行っていきたい】【穏やかな最期を迎えら
れるようなケアの実践を行った】【家族が付
き添える環境を整えたい】【看取りの居室へ
いつでも行ける雰囲気があると良い】【職員
・家族の死生観の育成の必要性】【経験談
や学習会を通じて学んだことを自分に取り
入れていきたい】【皆が納得できる看取りケ
アとは何かを考える】【看取りケアに対して
不安・困難さ、課題を感じている】【経験が
ないため分からない・今後参加していきたい
・今後も継続して取組みたい】の 9 つに分
類できた。【入所者・家族にとってより良い
看取りケアをおこなっていきたい】や【経験
談や学習会を通じて学んだことを自分に取り
入れていきたい】のような看取りケアへの
思いの他、【家族が付き添える環境を整え
たい】【看取りの居室へいつでも行ける雰
囲気があると良い】【職員・家族の死生観の
育成の必要性】や【看取りケアに対して不安
・困難さ、課題を感じている】のような今後
の課題や要望等の回答が得られ、看取りケ
アに取組んでいくことが推進された。

以上から、さらに取組んでいく上で、最
期まで家族や職員が付き添えるような環境
の整備、職員や家族への死生観の育成、学
習会の継続等の必要性が明らかとなった。

本取組において、職員だけでなく遺族面
接による評価を得て試案の看取りケア体制
を検討したことは、入居者中心の看取りケ
アに繋がる体制整備として精選されたと捉
える。また、本取組みは、職員の看取りケ
アに対

する不安の軽減や穏やかな看取りケアに
対する職員の意識向上に繋がったと捉えら
れる。本取組は、研究期間中に関わること
のできた 2 事例からの看取りケアの指針・マ
ニュアルおよびケア体制の再検討であり、A
特養における看取りケアの体制整備として
は十分に精選されているとは限らない。ま
た、特養 1 施設での取組であるため、本取
組の過程をすべての施設において一般化す
ることは困難であるが、今後、看取りケア
体制を整備していく施設にとっては、入所
者が穏やかな死を迎えることのできる看
取りケアの実現するための本取組の過程は
示唆を与えられるものとする。

本取組に対する職員の評価から、職員や
家族への死生観の育成、学習会の継続等の
必要性が示唆されたように、今後の課題は
、本取組の過程を基盤とし、事例の積み重
ねによる、また、法の改正や職員の看取り
ケアに対する意識の変化、高齢者の重度化
等に合わせた看取りケアの指針・マニユ
アルの精選、さらに職員のニーズに即した
学習会の実施を行い、A 特養において更
なる「入所者が穏やかな死を迎えること
のできる看取りケアの実現」に向けて取
組むことが必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者
には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

古田さゆり、小野幸子、B 特別養護老人
ホームにおける看取り介護実現への取
組みと課題、岐阜県立看護大学紀要、
査読有、10 巻 1 号、2009、33 - 42

〔学会発表〕(計 1 件)

古田さゆり、特別養護老人ホームにお
ける死の看取りを含む終末期ケア体制
整備への取組、日本老年看護学会第 13
回学術集会、平成 20 年 11 月 9 日、
石川県立音楽堂

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古田 さゆり (FURUTA SAYURI)

岐阜県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：